



馬耳東風

「日本の家畜・家禽」(監修・著 秋篠宮文仁 小宮輝之学研)に掲載の若冲「群鶏図」は、何と精緻で格式の高い奇想画か。佐藤康宏東大名誉教授は軍鶏や矮鶏に同定できるもの以外は概ね小国系統に属するようだとしている(若冲の世紀 東大出版会)。江戸時代の鶏を写生的な装飾画体で見事に描き出している。闘鶏が盛んだった時代のことだ。絵画といえば浮世絵と狩野派や琳派の時代である。最近人気の伊藤若冲(1716~1800)は対象をよく観察し見たとおりに描く、いわゆる本物の実証主義的な写生画の誕生である。動物は吉祥画としてそれぞれ得意分野の画家が誕生した。鼠は白井直賢、鹿は東 東洋が、虎絵の岸駒は中国から虎の頭骨を入手して皮を被せて計測し、科学者のような対応でリアルな絵を描きあげている(内山淳一 動物奇想天外 青幻舎)。その中で吉祥の鳥とされる鶏は、若冲の専売と言われるほど羽毛の一本一本の動きを正確に捉えている。また、動植綵絵の「池辺群虫図」は池辺にたわわに実る瓢箪の下に、蛙、蛇、蟻、蜘蛛、蜚蠊、蝶など沢山の生き物が写実的に描かれまるで生態図のようだ。狩野派幕府奥絵師の筆頭格狩野栄信の「百鳥図」は、旭日の下で梅や牡丹がほころぶ池辺に集う小鳥たちの姿形から、モデルになったと思われる錦鶏、孔雀、雉、鶉、雀、四十雀、尾長、鶇、鴨から燕など、孔雀は鳳凰を思わせる作風で吉祥的な意味合いが濃く異質に見える。若冲の「百犬図」も当時の

日本犬の真っ白から真っ黒や茶色まで、まだら模様はとでも可愛らしく作者の造形感覚がうかがえる。どの犬の表情も同じように見受けられるが子犬のコロコロしたモフモフ感に見とれてしまう。画壇の主流だった狩野派は、武家の御用絵師として力強く格調高く、琳派はきらびやかで斬新さを持ち、掛け軸や屏風絵として日本の家屋に最も適応し発展してきた。北斎や広重らの浮世絵とともに日本画壇を支えてきた。版画で独自の美を開いた浮世絵は、風俗画として錦絵で全盛期を迎え庶民に愛され西欧美術にも影響を与えた。若冲は京都で町年寄として活躍し隠居後絵師として自立した。鶏は瑞鳥鳳凰のモチーフとして、一方瓢箪は穀物栽培のはるか以前に栽培化され、狩猟採集の時代に重要な食料となり、円満とも呼べる美しい形態に特別な観念、崇拜、信仰を持つに至り習俗を形成した。さらに瓜類は種子が多く、子孫繁栄の最上の象徴として描かれた(鈴木健之 東京学芸大学紀要)。若冲は、西陣織製作工程の正絵に触発もしくは織成する白象群獣図など「柵目画」作品を自己の作画原理に従い自由に描出し、執勘に物を凝視する姿勢で絵画に染織的な表現を取り入れた(泉美穂 金沢美術工芸大)。西陣美術織・伊藤若冲動植綵絵として西陣織と融合した「奇想の画家若冲の傑作と伝統工芸の調和」展に足を運び驚異の達成感を味わった。古都京都で美術工芸に西陣織が深く関わり、日本が誇る名画作成に熱く連携しながら、若冲の功績を継承する絵画と連携の時節を迎えたようだ。(柏)